

東日本大震災後、2011年の「今年の漢字」に「絆」が選ばれるなど、人のつながりが注目されています。共同体への貢献を善とする徳倫理では、徳は共同体で他の人たちと生きる中で学ぶ絆を重視します。徳倫理を使い経済モデルで絆を考えられます。

1974年に米国のゲリー・ベッカーとロバート・ローが、家族の絆のモデルを別々に発表しました。親は子供を思いやる利他性を持ち、

やさしい こころと**経済学**

第2章 倫理観・価値観と絆 4

慶応義塾大学教授 大垣 昌夫

自分の消費や余暇だけでなく我が子の効用からも満足を得る、という異世代間利他主義モデルです。米シカゴ大学のケイシー・ミリガンは同モデルを発展させ、子供への利他性が、子供と過ごす時間などに依存するという内生的選好モデル（モデル内で決まる資源配分の条件で選好が変化す

るモデル）を提唱しました。ミリガンのモデルを使い、親が子供と過ごす時間を長くすると子供への利他性が増すが、労働時間は短くなり所得が減る状況を考えましょう。親は利他性のある選好のもとで、所得を自分の消費と子供の消費に分割するとします。政府が所得税率を高くする

親子のつながりを分析

と、親は労働をする利点が小さくなり、子供と過ごす時間を長くします。一方、政府は税率をマイナスに設定し、長時間労働の奨励もできます。

このような状況を考えることでワーク・ライフ・バランスを、どんなアプローチで分析すれば良いか調べられます。倫理観により結果は変わってきます。自由を最高の価値とする倫理観では、所得税率をゼロに設定することが最善となります。経済効率や所

得を重視する厚生主義では、所得税率をマイナスに設定することが良い場合があります。徳倫理では、所得税率を高くして子供と過ごす時間が長くなることをよしとします。

徳倫理と厚生主義の両方のバランスをとる倫理観が、多くの人が持つ倫理観ではないでしょうか。その場合、所得税率は純粋な厚生主義と、純粋な徳倫理がそれぞれ勤める所得税率の中間の所得税率を推奨すると予測できます。